

DRAMA かながわ 68

神奈川県演劇連盟事務局：横浜市中区福富町西通り52(横浜演劇研究所内) Tel.045-261-4866

劇団よこはま壺座プロデュース「雪やこんこん～湯の花劇場物語～」

作：井上ひさし 演出：濱田重行 4月26日(金)～28日(日)

於：神奈川芸術劇場 大スタジオ



TAK IN KAAT

文：高津 一郎



神奈川県演劇連盟プロデュース「踏切があがるとき」

作：緑慎一郎 演出：土井宏晃 5月3日(金)～5日(日)

於：神奈川芸術劇場 大スタジオ

「雪やこんこん～湯ノ花劇場物語～」

この劇団<よこはま壺座>が再出発して以来、少し不安定な感じがして、いったい何処を目指すのかな…、といささか気掛かりだった。

余計のことかも知れないが、前身の<蒼生樹>から数えていけば30年余にもなる付き合いだ。どうでもいいと云う訳にはいかない。

ところが今度の<TAK IN KAAT>の公演パンフで座長・演出の濱田重行が「新劇を信奉する以前に、大衆演劇によって私の演劇観は決定されていたのだ。」と宣言した。

そして更に「彼らの芝居は落ちこんだ気持ちを引き上げ、笑いを振り出し、涙を誘う。」「古くさいとも、時代遅れと云われようとも、お客様の拍手がほしいという実直な気持ちが、庶民の山盛りの心をつかんでいる。」と大衆演劇の<心>を受け継ぐ覚悟の程を表明したのだ、と受取った。ガンバレ<よこはま壺座>!

そう云えば50年も60年も前のドサ廻りの世界って<猥雑>で<えげつなく>、そのくせ<キラキラ>してたなんて思い出しながら壺座の「雪やこんこん」を見た。

昭和20年代終り頃の冬。吹雪の夜。温泉場の芝居小屋に旅廻りの一座、座長の中村梅子と頭取の勝次が先着する。

その後から二枚目の信夫、女形の金吾、女優のひろみ、じかたの光夫がたどり着く。総計6名。これで一座の全員だ。そして一行を出迎えたのは芝居小屋の女将和子と楽屋番の庫之助、女中のお千代の三人だ。実は梅子一座、移動の間に敵役の役者にドロンされて先々への不安を抱えている。そんなことから座長と役者たち、あとになると女将和子も巻き込んで丁々発止のやりとりが始まる。その中には一座の立て直しという深慮遠謀が隠されている楽屋芝居なのだが時々ボロが出るので分かってしまう。とにかく最後には、昔芝居上手の女優で現在因業な旦那にこき使われている和子と庫之助を救い出して一座に入れて陣容を立て直して、新中村梅子一座が大衆演劇の聖地浅草の劇場に進出する計画であることが明らかになる。



だから<虚と実>を交ぜこぜにした楽屋芝居、一座の命運がかかっているから活気があって面白い。またそれだけではなく、旧劇のせりふ廻しを援用してのやりとりは人の気持をのせて走る感じがあって快い。

役者について言えば、先ず中村梅子役の勝碯若子だが、座長の重責を一身に背負っての気合いの入った熱演で観客を引き付けた。和子は女将と云うよりは一見若奥様風で、エツと思った。梅子との対比をきわ立たせた為にそうなったのかも知れないが、もうチョイ伝法肌であってよかったのではないか…。その演技には芯があって段々に地金を見せてくる確かさがあった。番頭の勝次は座長一筋の作りで、また後見として一座の動きをしっかりと見ていた。楽屋番の庫之助は和子を守るだけでなく、一座の者たちに対しても気くばりが行き届いていて、この芝居の根っこに欲しい心の温かさを醸し出していた。好演。三人の役者さん、地方さん、女中さんも今回は受けの演技のいい勉強になった筈だ。

とにかく、面白かったし、楽しかったし、良かった。もう少しテンポができれば尚良かった。

「踏切があがるとき」

ゴールデンウィークのさ中、KAAT大スタジオで神演連がかゝった対称的な二つの公演が行われた。対称的と云ったのはその活動が神奈川の市民演劇の状態を浮彫りにしているように思えたからだ。

その一つ目は前の<劇団よこはま壺座>による単独公演「雪やこんこん」で、裏方は劇場のルール上プロを使っているが、他の会場でなら装置を除いて座員が担当できるだけの実力を

備えている。役者も客演は2名。要するに自立性が高い。

一方、<神演連プロデュース公演>と銘打った「踏切があがるとき」の方は19名という大勢の出演者中<神演連>所属が6名で、その他13名が他のグループから客演してくれている。その参加なくしては公演は成立しなかったわけで、有難いことだが、最近<神演連>の事業にはこの方式が増えてきている。

とにかく、公演方式としては「雪や…」と「踏切…」は全く別のものであり、このまゝいくと活動の二極分解が起きるかも知れない。

余談はそれまで。そこで緑慎一郎作・土井宏晃演出の「踏切があがるとき」だが、先ず作者の緑が自分の父親小泉修二が若き日、民営化で激動する国鉄の駅を舞台に、国労の一員として倒れるまで闘い抜いたその過去を深く探ってドラマにするという困難な作業に立ち向かった。その姿勢はフィクションと云うよりはドキュメントに近い印象がある。また闘争の実体については、その体験者である父の先輩武田からの報告を根拠にしたようなので信憑性もある。舞台は国鉄の鴨宮駅。そこに駅長・助役の他、国労5人、鉄労3人の組合員が居て闘争をくり広げる。国労と鉄労の対立。マル生と国鉄民営化反対闘争。政府・国鉄当局からの弾圧。闘争仲間の裏切り。警察の介入。そして孤立、脳梗塞。などなど、が起り修二は追い詰められ、退院後退職する。この場数の多い現場での闘いを土井演出は丹念に、しかもスピード感をもって進行させ、シリアスドラマ作りの手腕を示した。また修二役の鈴木舜はじめ労組員を演じた若い役者たちが、自分たちの運命が激変するかも知れない変革を前にして、激昂し動揺するその悲痛な叫びを充分に客席に伝えた。アクの強い仲尾と山科の芝居はその流れに変化を与えていた。

修二入院後芝居は修二、妻の良子、息子の聡一それぞれの生き方を見せ、最後に聡一は<戦う父>の像を獲得し、誇りを取り戻して終わる。

しかし、それで良かったのだろうか…。

裏切りと孤立と敗北と重病と、その重なり合う苦渋の果てに修二を襲った<心の闇>があった筈だ。後半の聡一は、修二の<心の闇>と向かい合わなければならなかったのではないか…。年齢構成を変えれば可能だった筈だ。

事実とは違うかの知れない。しかし、それが<ドラマの眞実>ではないだろうか…。



TAK IN KAAT 観劇記

劇団よこはま喜座プロデュース 「雪やこんこん〜湯の花劇場物語」観劇記

まりこ☆みゆーじあむ 川井真理子

劇場に入り、客席に落ち着いて舞台に目をやると、舞台になる旅館に併設された芝居小屋の楽屋と、その屋根に積もったであろう雪が大きく大きくのしかかっている装置が目に飛び込んできた。雪が積もる家並みも後ろに続き、開幕すると吹雪く風の音が長く長く続く。

雪深い地方を舞台に繰り広げられる「大衆演劇」の期待に胸が弾む。時代は昭和29年、12月中旬。場所は北関東のとある湯治場の旅館が経営する芝居小屋。

猛吹雪の中、ここまでの道中給金も貰えずドロロンする役者が出たりと、かなりピンチな貧乏な大衆劇団「中村梅子一座」がたどり着く。やっとの思いで辿り着いた小屋も入口が雪の重みでつぶれてしまい、今夜の幕は開けられない。正月興行まで一座を持ちこたえたい女座長・中村梅子の一

芝居、「座長梅子と、この劇場を預かる女将の涙の親子対面」。更にこの女将を再び芝居の世界へ戻そうとする魂胆があり、虚実ないまぜの話が繰り上げられる。

中村梅子・女将の芝居はよかった。また脇をしめる役者たちも好感がもてた。複雑な話の筋書きも勿論面白いのだが、何ととっても、ぽんぽんと繰り出されるセリフ。

胸に飛び込んでくる数々の名セリフが心に残った。

座長始め役者たちの、大衆演劇ならではのセリフ使いや、発声などの稽古がしのばれる。座長役の勝崎さんが、この作品を演じたいと駆り立てたものがあつたのも理解できる。そしてこのセリフに共感したり、感動したりと日常生活に元気を与えてくれる、正に、大衆演劇の醍醐味だ。

昭和29年頃、終戦直後の食うものにも困った貧乏劇団の悲壮感はあまり感じられなかったが、やっぱり面白かった。

最後に、一座全員が客席に向かって鏡なしで化粧を始める。口上があり、雪がやみ、雲のない天をあおぐ。

「嘘と誠が雪の重みでつぶされる」ことなく、あつぱれな芸と舞台を見せて頂けたと思った。

神奈川県演劇連盟プロデュース 「踏切があがるとき」観劇記

井上 学

「どんな人も生涯に1本は傑作を生みだすことができる。それは自分の人生を描いた作品だ——劇作初心者への励ましとして古くから言われてきた言葉だ。だがそれは励ましとは裏腹に容易なことではない。傑作を成すことはすなわち、自分の人生に真正面から向き合うことだからだ。

父は国鉄で働いていた——このキャッチフレーズは魅力的だ。国労の組合員だった実父の生涯を描いた作品。物語を想像しただけで昂るものがある。だが、芝居が進むにつれ僕の胸に去来したのは、それがこの作品の本質ではない、ということだ。社会派ドラマの様相を呈しながら、実はこれは「ホームドラマ」なのである。しかも、観劇後の多くの観客が「感動」を口にしていたように、大変よくできた家庭劇である。

胸に響くものを感じ、ダブルコールに同慶の念を抱きつつ、僕はいくぶんの空疎さも感じないわけにはいかなかった。それは一体何なのか。僕自身にあの時代を切実に生きた体験があるわけではないが、それでも当局に潰されそうになっている組合内部に、どのような事態が起こるかは容易に

想像できる。ぬめぬめとした陰湿さや憎悪に裏打ちされた、実体の見えない不気味な力。それが純粋な若い組合員を追い込み、人間不信に陥らせ、やがて家族をも巻き込む自暴自棄へと追いやってしまう。僕が空疎さを感じたのは、その状況とそれが生みだした苦しみ、怒りや哀しみを深く共有することができなかったからだ。十分に描かれていないと感じたからだ。もしそこに深く共感できたら、最晩年の父親が不自由な身体をおして山に登った時の、頂上から見た風景は、察するに余りあるほどの想いととも、僕の目にも清々しく美しく見え、作品から受ける感動はさらに強いものになったであろう。社会派ドラマを期待していた人々にとっても、期待を超える作品となったであろう。

これは作者の人生を描いた作品である。そこに正面から向き合ったことに、僕は心からの敬意を表す。だからこそ、もう一段の深みを見つめ直してリライトし、緑慎一郎の「生涯の傑作」として再演してほしい、と強く願っている。

それにしても、所属の異なるメンバーが幅広い年齢層で集まり、これほどの舞台を作り上げたのは、日頃の県演連の活動が最良の形で結実したと言って間違いない。プロデュースという形式にはさまざまな批判もあるが、劇団かプロデュースか、という二項対立の不毛な議論ではなく、何が優れた舞台をつくる要素なのかを探る建設的な議論への、ひとつのステップとなるべき公演であったと、僕は思う。

第10回神奈川演劇博覧会

文：神奈川演劇博覧会 実行委員長
緑 慎一郎

日時：2013年3月16日(土) 17日(日) 20日(水・祝) 会場：神奈川県立青少年センター ホール

個性豊かな演劇博覧会

第10回 神奈川演劇博覧会が今年 3月16日(土) 3月17日(日) 3月20日(水・祝) と開催されました。参加団体は登場団体順に“16日・チリアクターズ、横浜演劇研究所附属横浜小劇場劇団、逗子市民劇団なんじゃもんじゃ、ムーム企画、ふねをゆらす” “17日・四ツ葉屋、劇団カレーライス、湘南テアトロ☆デラルテ、劇団JOKER、演劇プロデュース『螺旋階段』” “20日・ミュージカルプロジェクト The Yokohama Shakespeare Group、神田外語DRDM、ヨコスカ・ベアフットシアター”と14団体が参加しました。本当に様々な芝居の形を各団体が見せてくれました。上演時間は50分、転換がすぐにできる舞台装置という制約のある中、ストレートプレイにはじまり、朗読劇、英語劇、ミュージカルなど楽しめるラインナップとなったことは偶然とはいえ、演劇博覧会の形をあらわしているものではないかと思えます。また、14団体が同じ舞台を共有するという事は、他の団体のことを考えて行動することにつながります。演劇博覧会実行委員会の中で他の団体と話し合い、共通する照明、転換の仕方などの意見を出し合うことはお互いの団体を理解しなければ出来ないことです。演劇博覧会は通じて他団体と交流を持つことによって今後の活動がもっと飛躍することを期待しています。

第10回演劇博覧会の内容を少し振り返ってみたいと思います。今年は例年より初参加団体の数が多かった博覧会

となりました。しかし、初参加を感じさせない、個性豊かな表現をしてくれたと感じています。16日は初参加団体が4団体あるなか、小劇場が朗読劇、なんじゃもんじゃが子供も大人も楽しめる「三まいのおふだ」など多彩な公演となりました。また、ムーム企画は舞台上に卓球台をあげて上演中のほとんどを卓球しながら観客に見せるという奇抜なアイデアを見せてくれました。17日は小田原から二団体、湘南地区から二団体、大和から一団体と横浜から離れた地域で活躍している団体が集まりました。また、三日間を通じて唯一、5団体ともストレートプレイを上演するという演劇色の強い日となりました。劇団カレーライスの「残空」は50分の中に笑い戦争のコントラストで感動を誘ってくれました。20日はミュージカル・英語劇・朗読劇と演劇の様々な形を見せる日となりました。ミュージカルプロジェクトは決して広くない空間に40名ほどのキャストが踊り歌うという迫力ある舞台をみせてくれました。三日間、全28ステージ、本当に各劇団お疲れ様でした。入場無料・出入り自由と銘打っての演劇博覧会も第10回目を迎えることが出来ました。「演劇の敷居を低くして、普段芝居を見ない人々に芝居を見てもらおう」を合言葉に始まったイベントの名の通り、延べ人数で2000名に近いお客様にご覧いただきました。アンケートの中に芝居を初めてみました。また、観たいです。と書いてくださるお客様もいてこのイベントの素晴らしさを改めて認識することができました。本当に演劇博覧会に関わったすべての人に感謝したいと思います。

神奈川演劇博覧会 第11回参加劇団募集

【演劇博覧会とは?】

神奈川県演劇連盟が主催する演劇の祭典で通称「演博」。

「入場無料! 出入り自由!!」と銘打ち、神奈川県下で活動する劇団が集まり、小作品を連続上演してゆくという催しです。「演劇の敷居を低くして、普段芝居を見ない人々に芝居を見てもらおう」を合言葉に始まったイベントです。数多くの劇団が一週間に渡り様々な作品を上演することにより、観客にとっては色々なジャンルの芝居を無料で観劇でき、参加団体にとっては劇場使用料などの金銭的負担から開放され、更には他団体の観劇を目的として来場した観客にもアピールができるというたくさんのメリットがある企画です!

【募集締め切り】

2013年9月30日(必着)

【申込み・問合せ】

神奈川県演劇連盟事務局 〒231-0042 横浜市中区福富町西通52 公団ビル1F
TEL:080-5659-2757(火曜~日曜9時~16時半) FAX:045-261-4865
mail:kenkyujyo@yokohama-engeki.or.jp HP:http://kenenren.org/

「神奈川演劇博覧会に参加して」

先ずはお詫びを申し上げたい。本番当日、役者の到着が遅れ、開場ギリギリになってしまい、関係者の皆様には多大なご迷惑をおかけしてしまいました。本当に申し訳ありませんでした。なんとか間に合ったのが不幸中の幸いだった。

実はそれは芝居も同じで、なんとか板に乗せる事ができたというのが実際の所。いやはや、言い訳がましいが、本当にギリギリだった。普段、4カ月以上の稽古期間を経てチリアクターズは公演を行っているので、実質一カ月余りという時間の中での稽古はスリリングだった。両公演とも大きなミスも無く終了したのは幸運だ。運が良かった。なので、「よく稽古されていた」などと表されるのは本当は本意だったりする。勿論、日々訓練を続けている団員たちではあるが…。しかし裏を返せば、まだまだ良い作品が作れるというのは一つ、自信になった。

実はこの原稿も6月の本公演の追い込み中に作成しているのだが、気を引き締めて、今年は11月にも本公演があるので、また別のチリアクターズの表情をお見せできる様に精一杯やっていきたい。

なにはともあれ、初参戦で右も左もわからぬ私達をフォ

ローしてくださった、緑氏を始め、連盟の方々、当日スタッフの皆様、そして全てのお客様には、感謝してもしつくない思いがある。そして是非、本公演にも来てほしいという思いがある。皆さんがいたから、チリアクターズは演劇博覧会に参加できました。ありがとうございました。この恩はさらにいい芝居をすることで返すことしかできません。私はそれしか方法を知りません。

最後に一つだけ、更に、演劇博覧会の質の向上の為に敢えて申し上げますが、繰り返し行った会議。出席率の悪さはともかく、その中身。忘れられない、音響を巡ってのあの堂々巡りの一時間。ああいう効率の悪さ、改善していかないと、と思います。あの様な意味不明な「のさばり」が全体のモチベーションを下げ、思い出の種類を悪化させ、巡り巡って、お客さんの満足度につながると思います。

次回の演劇博覧会がもっともっと華やかで実のある物になる事を祈って。今回は、ありがとうございました。たくさん勉強になりました。

チリアクターズ 大島寛史

私ども劇団カレーライスは今回初めて演劇博覧会に参加させていただきました。短い時間の芝居ではありましたが、演劇博覧会は今まで当劇団を見たことがないお客様にも観劇いただけるよき機会となりました。

そしてやはり見る人が違えば芝居の反応も違うのだなと感じました。今回上演させていただいた『残空』は再演でした。しかし以前の公演とは笑いのポイントなど反応が違い、「ここで笑うか？」といった感じでした。あまり笑えない、サムい感じをイメージしていたので、思った以上に笑っていただけよかったです。「笑いは起こるが喜劇ではない」。これは今回の芝居のテーマの一つではありました。

しかし、多くの方々に見ていただける機会であったのですが反省点もありました。当劇団を初見の多くのお客様が思った以上に多く、それゆえの反省点なのですが、上演作品の『残空』は劇団カレーライスの中でも異色の作品であり、普段の芝居の傾向からは一線を隔す作品でありました。

他の公演が直前後にもあるといったタイトなスケジュールであったため、稽古日数、出演者数、そして未知の演劇

博覧会における芝居という状況から『残空』を選出したのですが、初見のお客様が次回見にいらした際に印象が違うということにもなりませんので、ここにもう一つ劇団カレーライスらしさというものを入れられれば良かったと感じております。

演劇博覧会への参加は初参加でありましたが神奈川で活躍する他団体との交流ができる点は非常によかったですと思います。しかし、初参加ゆえの未知のこともあり、思った以上に平日に時間がとられたということは感じました。ですので、予め申し込みの際に、会議、仕込み、リハ、撤収などおおよそどのくらいの日数でありどれくらいの時間が必要なのかを教えていただければよかったですと思います。

今回は演劇博覧会に参加させていただき誠にありがとうございました。多くのお客様、多くの団体とも知り合えるよき機会となりました。ぜひ次回もスケジュールが会えばよろしく願いいたします。

劇団カレーライス 田中裕介

2013年度 神奈川県 演劇連盟 総会

文：井上 学



去る4月6日（土）、春の風がせまる中、横須賀市勤労福祉会館（ヴェルクよこすか）ホールにて平成25年度神奈川県演劇連盟総会が執り行われました。

来賓として吉田雄人横須賀市長、同市文化振興課小澤公雄課長、神奈川県立青少年センター薄井英男館長、同舞台企画課池上裕課長、および横須賀演劇連盟梶ヶ谷美香理事長をお迎えし、役員・代議員、傍聴者を含め、総勢50名を超える盛会となりました。

まず初めに劇団蒼い群の福本代表を議長に選出し、平成24年度の活動報告から議事がスタートしました。冒頭、横田理事長から昨年度の総括と新年度に向けての提言として、これまで行ってきた連盟の8つの事業に加え、内部に向けた事業を考えていきたいとの発言があり、新年度の方向性のひとつが示されました。

活動報告は、神奈川県演劇フェスティバル、TAK in K A A T、機関誌DRAMAかながわ刊行事業、神奈川県演劇博覧会、演劇資料室運営、県への要望活動、世界演劇祭の各担当者が成果と課題について言及し、代議員の過半数の賛同によりすべての報告内容が承認されました。

会計のとりまとめが間に合わず、会計報告がなされませんでした。総会開催時期が例年よりも早いことから、前月の理事会において、総会後の理事会での報告と承認という形が了承されており、その旨が横田理事長から報告さ

れました。異例の事態だけに一部代議員から異論も出ましたが、最終的に上記理事会決裁の方針が了承されました。

休憩を挟んでの新年度の活動方針も、各担当者により前年度の課題をふまえた発言がなされ、新年度予算案を除き（会計報告と同様の措置）、すべての方針が承認されました。また、今年度から新たに、県立青少年センターにおける「マグカル劇場」の運営について事務局業務の委託を受けることが報告され、同センターの舞台企画課池上課長より概要のご説明をいただきました。

総会后、同じ会場で交流会が開かれ、劇団の枠を超えた対話の機会が設けられました。中でも神奈川県演劇界の長老と言うべき高津一郎氏がエールを込めた発言をしてくださったのは、望外の喜びでした。



神奈川県立青少年センター・演劇資料室を御利用下さい

演劇資料室では、外国や日本の戯曲をはじめ演劇雑誌等多くの演劇図書を取り揃えており、戯曲などの無料貸出もしています。御利用は一回3冊まで2週間借りられます。また神奈川県内のアマチュア劇団の活動記録等もございますので大いに御活用下さい。皆さまのお越しをお待ちしております。

神奈川県立青少年センター 2階 演劇資料室 〒220-0044 横浜市西区紅葉ヶ丘9-1 ☎045-263-4400（代）内線5301

僕らの演劇

リリエンタルプロジェクト.vol.4

「トロイメライ」

作・演出 井上 学

4月26日 於:神奈川県立青少年センター 多目的プラザ

初 回を観劇させて頂きました。新さるがくのオープニングが国会議員の刺客や、安部首相やイチロー他の物まねでスタートしたところはとても斬新なスタイルだと思いました。



しかし、ほぼ第1話から第6話位のあいだ探偵事務所(現実)と狂言(幻想)の世界を交互に舞台上に設定しながら作品を構成し、井戸の底、探偵事務所などに箱を使い想像力をかきたててくれましたが、途中から実験的劇場(私の感想)の良さに気持が追いついて行けなくなり、観客としては中途半端な気持に疲れがでてしまいました。何かを作り手と観客(私)との間で不釣り合いが生じたのだと思いますが、それが何か今だに良くわかりません、多分私の心象風景と現実の世界がどこかで行き違ったのだと思います、それ程心理的なお芝居になっていたのではないのでしょうか。でも明かりやあまり音にたよらない世界は観客の想像力をたくましくしてくれて良かったと思いました。

劇団蒼い群 村田次郎

風雲かぼちゃの馬車 第十三回本公演

「一遍～地演出編～」

演出:土井宏晃 作:重信臣聡 4月27日・28日・29日

於:シアター711

『**一** 遍～地演出編～』は、3月に公演した「一遍～天演出編～」に続くものですが、「天」と「地」と違うものになっているとのことでした。劇場も違うので、装置も変わっているでしょう



し、キャストも違うそうなので、本当は両方観られたらよかったです。が、「地」の方しか観られず、残念でした。

開演前の前説もいつも色々工夫されていますが、今回は、写真撮影タイムがあり、かなりのお客様が、携帯やスマホで楽しそうに写真を撮っていました。

そんな楽しい前説とは裏腹に、物語には、鎌倉時代、激動する末法の世にあって、人々を救うために踊念仏を広めた男、一遍の生い立ちや生涯が描かれていました。歴史には疎い私ですが、この混乱の時代、その進む道に次々と現れる事象に立ち向かい、苦悩する姿や、人のために奔走する姿が印象に残りました。

僧とはいえ、当然ながら普通の人間としての感情が、人生を動かしていくのだと思いました。主役である一遍は、力強い動きや声で、異端者ながら人を惹きつける、さすがの圧倒的な存在感がありました。

また、念仏坊も持ち前のキャラクターを生かし、温かく、そして泣かせる芝居を見せてくれました。ここ数年で増えたほかの劇団員たちも、先輩たちに負けじと歌い、踊り、演じていました。

日本のミュージカルの源流ともいえる「踊念仏」は、「歌って踊って人を斬る」をキャッチコピーとしている風雲かぼちゃの馬車にはピッタリの作品であるともいえます。ただ、舞台が狭く、タッパもなかったためか、刀を使わない殺陣だったのは、ちょっとびっくりしましたし、やはり物足りない感じもしました。

あと、注文を付けるとすると、チラシの字が読みづらかったことと、いつも思うのですが、音響のボリュームが大きすぎること、ですね。

劇団麦の会 岡本みゆき

劇団河童座

「嗚呼!あっぱれ12人 2013」

構成・演出:横田和弘 5月17日・18日・19日

於:神奈川県立青少年センター多目的プラザ

多 目的プラザに足を踏み入れる

と、そこには12人が合議する部屋があり、3方を観客席が囲んでいる。河童座さんを観ていると額縁舞台より比較的この様な設定の空間が好きなのだと思う。先ずキャストは出演者のくじ引きで決められる。出演者はドキドキだろうが、観る方は1度だけなので、どの役が振られるかも解らないし興味は湧かない。それより過去3回はどの役だったのか教えてもらった方が比較できて面白いと思う。(観劇したのが最終回だった)芝居の中身は、12人の怒れる男のパロディー。全部の役の台詞を覚えるのは短期間では不可能だと思うし、演出の解説でも役割が理解できていれば、アドリブでOKとのこと、なのでアドリブがとても多い。中には不要なアドリブが多い役者がいて耳障り!途中休憩があ



るが、この時の飲物の騒ぎが最悪。芝居とは関係の無い仲間内のジャレ合いとしか思えない。

後半やっと本題に入り芝居らしくなったが、皆を説得していく方法が裁判員裁判を扱っているにしては、感情論が前面に出過ぎるキライがある。もう少し整理して理路整然とした納得の仕方を演出的の見せて欲しい。試みとしては評価するが、もう少し観客の身になって解りやすい工夫を望む。

最後に2つ質問があります。観客からの入場料の上乗せ(出来高払い)は、どれ程の反響があったのか? また、こんな大変な思いをさせられた役者たちは、技量向上に役立ったのか。

同じ芝居を志す者としては是非にもその成果が知りたいです。

よこはま壱座 勝崎若子

横浜小劇場

「北風のわすれたハンカチ」

脚本:安房直子 / 演出:高橋弘子

5月25日(土) 於:山手ゲート座

横 浜山手へフト祭の記念公演ということで横浜小劇場の朗読劇以外にも講演と演奏がありました。

私の勉強不足でゲート座は音楽の演奏会をすところという認識でしかなかったのですが、最初のゲート座についての講演を聞き、これまでのゲート座の歴史を知ることができて非常に勉強になりました。

朗読劇は「北風のわすれたハンカチ」というお話で「ダークファンタジー」というご案内があり、いったいどんなお話になるのだろう身構えてしまいましたが、私の想像した難解なファンタジーではなく、余計なことを考えなくても理解できる物語でした。

朗読劇なので、セットや大きな動きはないのですが、登場人物が入れ替わりやってきましたり、北風役の方々が北風の色である青い色を身に着けていたり、といった工夫がありました。そのシンプルさが、状況を想像しやすくさせていて、効果的だったように思います。また、通常の演劇のような動きはないのですが、登場人物たちと語り手がそれぞれ別で皆さん非常に聞きやすい声だったので、私は比較的後ろの席だったのですが、集中して物語の中に入っていけました。お話自体も主人公の気持ちや状況がしっかりと伝わってきて、最後は主人公がしあわせな気持ちになれてほんとうによかったなど思える希望のある終わり方で安心しました。



それとこれは偶然かと思いますが、音楽が関係あるお話でしたので、そのあとの演奏会につながる構成が自然に感じ、飽きることなく最後まで楽しめる内容でした。

劇団やぶさか 浅水真子

編集後記

TAK IN KAATは3年目、神奈川県演劇博覧会も節目の第10回となりました。どちらのイベントにも深く関わることが出来ました。今後も継続してドラマ神奈川の記事として取り上げられることを期待しています。今号は人物を取り上げるスペースが確保できなかったことはとて

も残念です。神奈川県演劇連盟にかかわっている役者・スタッフを取り上げ紹介していきたいと考えています。次号は青少年のための芝居塾。総勢100名ほどが出演したミュージカルを取り上げます。

編集長 緑慎一郎

| | | | |
|--|--|--|--|
| <p>平成25年度 神奈川県演劇フェスティバル KANAGAWA ENGEKI FESTIVAL 参加劇団上演スケジュール</p> | <p>劇団やぶさか 15th STAGE 「眠りの森 ~Girl's Side Adventure~」 作・演出:海老原あい 会場:黄金スタジオ八番館 8月7日(水) 8日(木) 9日(金) 10日(土) 11日(日)</p> | <p>横浜演劇研究所附属横浜小劇場 安房直子作品集より 『雪窓』『だれも知らない時間』 作:安房直子 演出:岡崎多延子/高橋弘子 会場:青少年センター 多目的プラザ 10月12日(土) 13日(日)</p> | <p>ミュージカルプロジェクト M.PinK 『劇王 神奈川』 会場:青少年センター 多目的プラザ 10月18日(金) ~ 20日(日)</p> |
| <p>まりこ☆みゅーじあむ No.15 「あそびば創って観よう!」朗読「おはなしころろ」 「赤ずきんちゃん・ヘンゼルとグレーテル・三匹のこぶた」 構成・脚色・演出:川井真理子 (原作 グリム童話より) 会場:相鉄本多劇場 8月31日(土)</p> | <p>緑慎一郎とミュキーズ Vol.2 『蠅取り紙』 作:飯島早苗/鈴木裕美 演出:笹浦暢大 会場:青少年センター 多目的プラザ 9月13日(金) 14日(土) 15日(日)</p> | <p>劇団こゆるぎ座 第61回公演 小田原情話「網」 作:後藤翔如 演出:楠田正宏 会場:小田原市民会館大ホール 10月26日(土) 27日(日)</p> | <p>劇団蒼い群 「旅の終わりに」-平成梁塵秘抄劇シリーズ- 作:五木寛之 演出:福本幸男 会場:横須賀市立青少年会館 11月9日(土) 10日(日)</p> |

神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- H&Bシアター ●演劇プロデュース『螺旋階段』 ●京浜協同劇団 ●劇団蒼い群 ●劇団河童座 ●劇団かに座
- 劇団川崎演劇塾 ●劇団こゆるぎ座 ●劇団麦の会 ●劇団やぶさか ●劇団横綱チュチュ ●劇団よこはま壱座 ●風雲かぼちゃの馬車
- まりこ☆みゅーじあむ ●ミュージカルプロジェクト ●横須賀市民劇場プロジェクト ●ヨコスカ・ベアフットシアター ●横浜小劇場

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>

DRAMAかながわ[第68号] 発行日:2013年7月31日 発行:神奈川県演劇連盟
編集:緑慎一郎(演劇プロデュース『螺旋階段』)・浅水真子(劇団やぶさか)・海老名信吾(劇団よこはま壱座)・関口素実・山元洋一(外部協力)